

本学着任の頃を振り返って…

1. お礼とお詫び

私のために、東京経大会誌（経営学）第 306 号に、退職記念号という名称を冠していただけのことで、心より感謝いたします。お骨折り下さった教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

退職当時に記念号のお話があったときには、喜んで承ろうかと思ったのですが、退職後暫くして、私個人の資料がかなり紛失していることに気がつきました。研究室の明け渡しの期限が迫り、先を考えずに資料や雑誌等を大胆に整理・処分したのですが、私の個人的な資料もそこに相当数紛れ込んでいたようです。「時の流れに身を任せて」生活をしてきたために、「自分の記録」を管理するという意識がこれまで完全に欠如していました。そのことに気がつき、記念号を辞退申し上げたのですが、多くの方々に説得され、結局再度お願いすることになりました。

そのため、学歴や本学での職歴、役職等に関しては大学からいただいた資料等から何とかりましたが、業績や非常勤講師等に関しては正確な資料がなく、省略せざるを得ない部分が残りました。特に、社会貢献に関しては、ほとんどのケースで、就任時期や正式名称等を確認できず、残念ながら全て割愛せざるを得ませんでした。お世話になった組織や機関等には、本当に申し訳なく思っております。衷心よりお詫び申し上げます。

2. 着任当時の東京経済大学について

職歴にもありますが、私は本学に経営学部助手としてほぼ 45 年前に採用されました。助手に決まったのは、私が博士課程 1 年の秋で、業績といっても修士論文、組織学会の『組織研究』に載せた書評、そしてあるシンクタンクから出した論文（修士論文以外は紛失）だけでした。東京経済大学経営学部長からの依頼により、一橋での恩師の宮川公男商学部教授（当時）が私を推薦して下さったことだけで決まったわけです。そんな時代でした。

助手には、給料や個人研究費、研究室等が規定通りに支給されました。一方、助手の義務は、入試の際の本部事務のお手伝いや定期試験監督といったものだけで、教授会への出席や委員の仕事はありませんでした。要するに博士課程での勉学に専念し、博士課程修了後は最低 5 年間本学で教職に就きなさいということだけでした。経済学部でも同期で一人助手に採用されたいのですが、その人は東京経済大学に就職せず他大学に行ったそうで、そのことが私以後助手の採用が停止されている遠因になったかもしれません。私を助手に採用し

本学着任の頃を振り返って…

てしまったのが最大の原因だという声も少なくありませんが……。私以前には経営学部には少なくとも4人、助手採用の先輩がいらっしゃいました。

現存する当時の建物は、本館（1号館）、第1研究棟、そして旧図書館（現進一層館）のみです。私が助手に採用されたときには第2研究棟は建設中で、最初の1年間は同期で経済学部採用された教授と同居（衝立で区切られていた）で、夏休みが明けたら、更に10月採用の専任講師が加わり、三人で以前は会議室だったらしい部屋をシェアした形でした。もっとも、私は助手でしたのでほとんど研究室を使うことはありませんでしたが。

3. 専任講師になってから

経営学部専任講師に任用された当時の本学は、経済学部（第一部と第二部）、経営学部（第一部と第二部）、そして短期大学部から構成されていて、全専任教員はそのいずれかに配属されていました。それぞれに学部長がいましたが、学部自治はほとんど無く、全てが全学教授会で決まるといっても過言ではありませんでした。各学部の人事やカリキュラム等は学部毎の「レア・プラン会議」で議論され、原案は決定されましたが、最終決定は全学教授会での審議を待つことになりました。全学教授会は最低月1回、時には2回開かれました。

大学からいただいた資料によると、1977年に専任講師になった年の10月から、学生時代にコンピュータを実際に利用した経験があるという理由で、電算機導入検討委員会の委員に指名され、翌年には全学教授会で導入の提案をさせられました。当時は「他大学の話を聞くと、コンピュータは金食い虫で、図書館予算が圧迫される」という理由で反対する教授が少なくなく、その教授達に全学教授会で何度も吊し上げられたりしたものでした。結局そんなことが3年続き、最終的には三学部長にお願いし、理事会決定という形で本学に汎用コンピュータは導入されました。

2年目には、更に出題委員が加わり、3年目にはその上入試委員と図書委員にまでさせられました。経営学部ではその頃大学院の設置が計画されていて、当時は設置基準が今よりも遥かに厳しかったために、教歴や研究歴の豊富な教授クラスの採用が優先されていました。私と中村青志さんの後暫くは若い教員の採用がなく、色々な委員職が二人に次々と回されたのです。入試委員になった直後に、委員会で推薦入試の導入が決まり、経営学部レア・プラン会議の場でその報告をしました。推薦入試に反対の先生方が多く、私自身も講師になったばかりで必ずしも十分に納得していたわけではありませんでしたが、入試委員会で説明された通りに経営学部で推薦入試のメリット等を説明しました。その最中に、前に座っていた教授が突然机を拳でドンと叩き、「そんなことは言われなくてもわかっている」と大声で怒鳴り始めました。その教授は「経営学部の三大瞬間湯沸かし器」と呼ばれていた名物教授の一人であることを、後で知りました。しかし、推薦入試は経営学部でも次の会議で了承され

ました。

二つの事例からも明らかですが、東京経済大学には、ベテラン教授も新米の専任講師も、会議の場で議論する限りは、基本的には対等であるという風土があったように思います。教授会では着任一、二年目の私も仕方なしに強硬な主張を繰り返したりしましたが、それによってその後特に忌避されたという記憶はありませんでした。勿論、馬の合わない教員も少なくはなかったのですか、そんなことは組織では当たり前のことです。こうした自由闊達な雰囲気が最近本学では希薄化しつつあることを、私は残念に思います。

4. 初めての授業

上述の様に、経済、経営の両学部には第一部と第二部がありました。開講される授業は原則としてどちらも同じということで、当時の持ちコマ負担は昼夜計 4 コマというものでした。私の場合は、管理工学を昼夜 2 コマ、そしてゼミを昼夜 2 コマの計 4 コマでした。その点では、現行の昼だけで最低 5 コマという制度は、少し過重かなという気がします。

専任講師になって初めての講義は、私の場合、曜日の関係で、第二部の管理工学の授業でした。教育法等の指導を一切受けたことがなかったので、流石に少し不安な気持ちを抱いて教室に向かったことを覚えています。しかも、当時の第二部の学生の中には、消防士とか警察官、地方公務員といった社会人が少なくなく、年齢も私と同程度から少し上というところでした。教壇に上がってふと前を見ると、教室の中央、やや前方、すなわち私の真正面にそうした学生が集まって座っていました。おそろおそろ自己紹介をした後に講義計画や評価方法などを説明したのですが、その正面のグループについつい目が行ってしまい、気がつくといつの間にか丁寧語になっていて、「おわかりになりましたでしょうか？」なんてことが、それからの講義でも暫く続いたものでした。

彼等の授業態度は真剣で、ある夜の授業終了後にそうした学生達に呼び止められました。「いつも教室の後ろで固まって私語を続けている者たちがいる。気が散ってしかたがないので、先生からきちんと注意して下さい。」というものでした。それ以来、退職する年度まで、私は授業中の学生たちの私語や遅刻、授業中の勝手な出入り等とは徹底的に戦う癖がつき、その分学生たちに嫌われたり敬遠されたりしたのですが、こういう教員の一人や二人は大学にいてもいいだろうと考えています。

5. 終わりに

こんな具合に東京経済大学での私のキャリアはスタートしました。その後も、パソコンの導入やネットワークの整備（ネットワークに関しては電算室の職員の人たちの貢献が大きか

本学着任の頃を振り返って…

ったと思います), 入試の出題におけるマークシート方式の導入と, それに併せての入試への教員の動員ノルマの大幅な縮減, そして国分寺キャンパスの比較的大規模な整備と, 大きなプロジェクトに私は関係してきました。

結構大きな予算を必要とするプロジェクトが多かったのですが, いずれもそう深刻な問題を起こさずに乗り切れたかなと自負しております。裏ではどう言われていたかはわかりませんが, 敢えて今更知りたいとは思いませんので, そういうことにしておきます。だらだらと書いても嫌われるでしょうから, この辺で筆を置きます。

最後に, 東京経済大学の教職員や関係者の皆様, 長い間本当にお世話になり, ありがとうございます。東京経済大学, そして皆様の益々のご発展を祈念いたします。

以上